

令和6年度練馬区立北大泉幼稚園 学校評価報告書

練馬区立北大泉幼稚園
園長 金子 洋子

1 自己評価結果

(1) 概要

① 教育活動について

[成果]

・今年度、開園50年目となり、長年育まれた歴史ある豊かな自然環境の中で、子どもが子どもらしく伸び伸びとそして生き生きと園生活を送れるように努めてきた。また、今年度は、組織を構成する教職員が大きく変化し、幼稚園経営として、今まで積み重ねてきた質の高い教育活動の維持に向けて、一人一人が意欲的に保育の充実に向けて取り組みつつ、細やかな連携を図っていき、これまでと同様の教育活動の提供を心掛けてきた。このような前向きで豊かな取組が保護者の理解・協力へとつながり、園児数は少なく、特別な支援を必要とする幼児の多く在籍する中でも、人と人がつながり合い関わり合う活気あふれる教育活動を行うことができた。新規採用教員を含め4名中3名が一新した担任陣も、充実した教育活動の実践に努め、保護者の参観・参加の機会での取組の工夫や、学級・学年通信も月1回以上発行するなど意欲的に教育活動に取り組む姿が見られた。今年で3年目となる写真入りトピックスの掲示板への貼り出しも継続的に行い、幼稚園としてわかりやすい発信を心がけ、実際に目にするのと様々な発信情報との両面から子どもたちの様子を知ってもらえるように努めた。時には、在園保護者だけでなく、未就園児保護者に対しても効果的にICT機器を活用し幼稚園での教育をわかりやすく伝えることで教育活動の理解や周知につながっていった。アンケートでは、保護者からは肯定的な評価項目が多く、その中でも半数が100%肯定的な評価結果となったのは、上記のこの成果であると考えている。

[課題]

・コミュニケーションや様々な活動への参加についても、特性や性格などによっては積極的な取組につながりにくいところがあり、評価がやや低かった。

[改善策]

・個々の特性や興味関心等踏まえた上で集団ならではの取組だったり、継続的な取組だったりなど工夫を凝らし、子どもたちに意識づけをしたり様々な経験を重ねたりしていけるように努める必要があると考えている。

② 家庭・地域との連携について

[成果]

・幼稚園での活動に保護者が参加したり関わったりする機会を意図的に増やし、子どもだけでなく保護者も直接体験をすることで幼稚園教育への理解を深めていってもらえるよう工夫していった。また、学年通信や園だよりでは、分かりやすく写真を取り入れ「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を書き込み、幼児の学びや育ちを知ってもらうことを意識してきた。その他にも、全員の保護者が毎日見る掲示板に、その日の出来事写真の掲示することで、他学年の教育活動の様子も伝わりやすくなり理解の推進につながる取組となった。また保護者会では前向きな参加に促す取組として、ICT機器を活用し、各種便りや掲示では未出の写真中心のスライドショーを毎回行い、幼稚園の教育のありのままをわかりやすく伝える工夫に努めてきた。保護者の興味関心をとらえ、伝わりやすさを意識したことで、遊びの様子や育ちについて理解してもらうことができた。

[課題]

- ・保育参観・参加など直接参加の機会を楽しんで好意的にとらえてくださる保護者が多く、より多くの参加の意向を示す保護者がいる一方で、就労している保護者や弟妹を連れての参加になる保護者、特別な支援を必要とする幼児の保護者はやや負担と感じていることを言いつらかったりする場合もあることから、頻度や回数も含めた内容の精選や早めに計画周知をしていくなどが必要である。最近の園児の傾向としては、大人が多いことや見られていることに対して過敏な反応を示す幼児もいるため、今までと同じような実施の仕方では難しい場面が増えてきているという現状がある。
- ・新入園児獲得も見据えて、未就園児保育の充実を目指し、実施時間や活動内容の工夫を重ね、利用者の増加を図ったが、地域に未就園児が減少している（保育園利用者の増加）こともあり、参加の減少や乳児の利用が目立ち、成果を実感するに至らなかった。また、毎月入園説明会を続けているが、特別な支援を必要とするお子さんの保護者がほとんどで、就学前の施設として幼稚園を選ぶ保護者の減少を顕著に感じている。

[改善策]

- ・保護者のニーズを考慮しつつも、子どもたちに過度な負担とならないよう配慮するなど、実態を考慮し新たな視点をもって保育参観・参加の在り方を考えていく。
- ・地域の未就園児家庭の利用の増加を目指し、就学前の施設として選択肢のひとつとなるように、回数・時間帯・内容について、近隣の未就園児保育実施機関などの情報も共有しつつよりよい実施の方法を探っていきたい。

③ 安全・安心な幼稚園について

[成果]

- ・経年の懸念事項であった園庭の遊具（雲梯、上り棒）の安全対策に対して関係部署の尽力もあり、安全基準を満たす状況となり、安心して使えるようになったことに安堵している。また、安全指導や避難訓練を毎月欠かさずことなく繰り返し取り組んでいることで、子どもたちが安全に過ごすために必要なことがわかって行動することができるようになっている。そのことは保護者にも伝わり、危機管理や緊急時の対応などに安心していただいているという結果につながっている。

[課題]

- ・施設の老朽化は否めず、安全面に対処するにあたり教職員レベルでは対応が難しいことも多くなっている。特に樹木の老木化は深刻で、裏庭の樹木を利用した遊具も使用を控えている状況が続いており、なんらかの対応が望まれる。昨年、園庭の大木の桜を伐採したことにより園庭の木陰がほとんどなくなり、夏の時期の熱中症対策も懸念事項である。

[改善策]

- ・引き続き日々の安全点検を丁寧に行いながら、危険の未然防止に努め、園内で対応が難しいところは関係部署へ働きかけ、専門業者による修理や診断の実施に尽力していく。

根拠となる資料 別紙1-1、1-2

2 学校関係者評価

(1) 総括

[成果]

- ・子どもが子どもらしくいられる場所として、園の特色を生かし工夫を凝らした教育活動が展開されている中で、子どもたちが成長している様子が感じられ、どの子も笑顔で伸び伸び生き生きと安心して遊んでいる姿を嬉しく思う。多様性に対応し、一人一人の子どもに寄り添い、環境や援助を常に考えている教師の努力が実を結んでの子どもたちの姿と考える。
- ・コロナ禍では難しかったことが解消され、各種行事を工夫して保護者も一緒に盛況に楽しんでいる様子が活気が感じられてとてもよい。地域の施設や区他機関（消防署、図書館、清掃事務所）と積極的に交流しているところも幼稚園の特色となっているのではないかと。
- ・保護者によるアンケート結果のほとんどが高評価であること、また自由記述の内容からも、園

への信頼感・期待値の高さが感じられる。素晴らしいコメントの数々に心打たれた。

[課題]

- ・園児数の減少は、大きな課題である。北大泉幼稚園のよさを知ってもらうことが必要だと思うが、どう伝えていったらよいのだろうか。
- ・近隣からの入園が少なく近隣の小学校に就学する子どもがほとんどいない。折角連携をしているのに、そこがアピールポイントにつながっていない。

[改善策]

- ・幼稚園を様々な方法で発信していく努力をさらに重ねていく。修了児保護者の口コミの力も頼りつつ、園外で保護者のサークル活動の機会を広げたりなど、未就園児親子の目に留まるような発信の工夫をしていく。近隣の畑の住宅化もチャンスにとらえ、新規の未就園児保育利用者に向けた発信に努める。
- ・園庭開放の拡大（時間・利用者）を図り、様々な人の利用につなげていく。

3 評価結果の公表等

自己評価及び学校関係者評価の結果概要を、年度末保護者会にて説明する。また、本報告の概要を本園ホームページに掲載する。

4 次年度の学校改善に向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

- 多様性を尊重し一人一人が伸び伸びと自己を発揮し自分の力を伸ばし共に育ち合う幼稚園
- 地域に根ざし地域を取り込む幼稚園づくりの推進
- 安全・安心な幼稚園
- 教員の資質向上と教育の参画意識の向上

一人一人が自分らしさを輝かせ、多様な友達との出会いを大切にし、違いに気付く中で関わりやつながりが感じられるような幼稚園作りを目指す。そのために、一人一人の発達や育ちにに応じて、環境や援助の工夫をしていき、幼児期に育みたい資質・能力を意識しながら教育活動を展開していく。担任との信頼関係を基盤にしつつ、全教職員で全園児と丁寧に温かく全園児を理解し関わることで、一人一人が安心して、伸び伸びと力を発揮でき体験の積み重ねと援助の中で、自己肯定感を育み友達と一緒に過ごす楽しむ姿になると考える。様々な感情体験に「寄り添う」ことを基本に指導・援助の工夫をし、保護者とも共有し連携を強化していく。

「地域にある幼稚園」として、子どもたちが地域の中で豊かな体験や様々な人との出会いを通して感動体験を味わったり、人への親しみ、楽しさが感じられるようにしていく。また、近隣の小学校、保育園との連携の方法も工夫して、架け橋期の教育の実践を目指し、研修にも積極的参加し、連携の中心を担っていけるよう努める。子育ての支援としては、幼稚園が地域の未就園児親子の居場所となるような取組の実施を推進していき、地域の幼児教育をリードし、地域に根ざし信頼・必要とされる幼稚園となるための方策を考えていく。

保護者とも信頼関係を築き共に子育てをする共育を進めていけるように努める。保護者同士が子育ての仲間として笑顔で助け合いともに育ち合っていけるように支えていく。

教職員で様々な危機管理意識を高めていくために、定期的に危機管理マニュアルを確認し合い、組織としての危機管理能力を高めていく。

I C T機器の活用については、効果的な利用について引き続き模索しつつ、日常的に活用していけるように尽力していく。

今年度の園経営は、保護者や地域のご理解ご協力のもと、関係各部署との連携や情報収集を重ねながら行うことができた。次年度も、子ども、保護者、そして教職員の学びと育ちの充実に向けて、質の高い教育実践が行えるよう研修に努め、園長自身も学びを深め幅広く情報収集をしながら園経営を推進していく。